

# 環 (あい)

光耀抄	2
琥珀集	5
瑠璃集	11
瑪瑙集	19
紅玉集	21
光耀抄月評	22
総合誌の窓	24
恵贈句集拝見	26
恵贈俳誌拝見	28
俳誌交歓	30
琥珀集作品鑑賞	31
瑠璃集作品鑑賞 I	32
II	33
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	35
火起し	37
奈良紀行	38
比叡山吟行	40

今月の一句

この樹登らば鬼女となるべし夕紅葉 三橋 鷹女

明治三十二年生まれ、昭和四十七年没。紅葉のなかでも夕日に映える紅葉は格別の美しさがある。紅葉に鬼女を配したのは、観世信光の能楽からの発想であろう。

しかし夕紅葉の持つ魔性的な魅力よりも、鷹女自身の持つ孤高性と内面に潜む女性的な執心・妬心・情念などの総括として鬼女を配置させたのではなからうか。直截的な表現を得意とする鷹女なればこそそのインパクトのある一句である。

塩路 隆子

# 野辺の石

塩路隆子

艶々と蛇穴に入る日和かな  
鶏頭の燃えにいささか疲労感  
曼珠沙華見むと在来線選ぶ  
たじろがむばかり月光浴びにけり  
木の葉蝶見失ひたり忍者の碑  
露けさにわが句記さむ野辺の石  
しぐるるや昭和を遠く日吉館

# 十二月号光耀抄

塩路 隆子選

一俵の新米届く少家族

秋の野の碑は万葉の置き手紙

醤油屋の帳場そろばん秋湿り

深呼吸一気に秋の深まりぬ

休耕田盗人萩に占められて

佐保路来て業平寺のさねかづら

秋声や直哉旧居のサロン椅子

山ほどの間引菜軽し朝の市

うそ寒し夕餉の膳の潮汁

秋夕映謎と神秘の五色沼

広告紙の飛行機上昇天高し

シースルーエレベータより翳雲

じゃんけんは仲良くあひこ新松子

濁流の大河膨らむ秋出水

夢千代の看板と稲架並びをり

竹内 悦子

伊東 和子

小澤 菜美

杉本 綾

三川美代子

笠井 清佑

小林 成子

和田森早苗

藤見佳楠子

増田 一代

宮田 香

宮崎左智子

森下 康子

安本 恵子

山口キミコ

まぼろしに夫の声聞き曼珠沙華  
視力得て気付く老醜女郎花  
立秋の雲鬱々といく日照雨  
国宝の茶室「如庵」や小鳥来る  
海峡を越えて飛び火や曼珠沙華  
逆上がり無心のやる気天高し  
秋野菜自家用米と並べ売る  
バリ島より届く絵葉書去ぬ燕  
新米の一俵が先づ米蔵に  
秋晴れやこの日限りのお姫さま  
高原バス遅延立待月に逢ふ  
飛鳥路に古代のロマン曼珠沙華  
雲遊ぶ見えつ隠れつ小名月  
天恵に謝す新米の重さかな  
急流の早瀬に遊ぶ石たたき  
辛口の夫に一献新走り  
禅林の一隅仄と花芙蓉  
手作りのずいき神輿や街を練り  
梵鐘を包む山霧延暦寺

中川すみ子  
新実 貞子  
能勢 栄子  
坂上 香菜  
坂根 宏子  
塩路 五郎  
杉野原弘幸  
鈴木 照子  
駒井 のぶ  
石川かおり  
北尾 章郎  
日山 輝喜  
横田 矩子  
山本 孝夫  
前川ユキ子  
松田とよ子  
水船みどり  
西垣 順子  
高谷 栄一

湖の茜と染まり渡り鳥

業平の隠れ里径すすきの穂

秋蔭やアメリカ発の不況なる

秋晴のどこかに帽子忘れけり

秋冷を連れ来し雨や旅支度

草むらに寝転び更に天高し

落蟬に蟻一山を築きけり

曳山に栄華の名残り秋祭

罽雲八風街道おほひけり

風吹けばコスモスにある昭和の香

アカペラで「コロラド」の月爽やかに

秋深し五分遅れの古時計

秋の夜のサッカー観戦友想ふ

爽やかに消防服の嫁凜々し

くるくるとまわるどんぐりあきのこま

えだまめのはっぱでにんぎょうつくったよ

こんにちはいなほがおじぎしていたよ

秋風が葉っぱもつれてやってきた

ハロウインのかぼちゃならべて大騒ぎ

田中 浅子

笹井 康夫

鷺見多依子

曾我美代子

桂 敦子

刈米 重夫

栗倉 昌子

井口 淳子

池田加寿子

伊藤 洋子

大谷 信子

藤本 秀機

齋藤 徳男

三原 利枝

森下ちさと

塩路 彩菜

中森 かな

広瀬 結麻

高野 綸

# 琥珀集



高山茶筌の里

伊東 和子

秋の野の碑は万葉の置き手紙  
露けしや茶筌の里の相伝図

竹林へ爽涼の風道連れに

一業を守り継ぐ里や竹の春

リルケの詩ひらく一篇秋の風

まなうらに父の温顔なごり月

虫すだくこの世にあまた別れ道

新米

竹内 悦子

一俵の新米届く少家族

草臥れて子に委ねけりとろろ汁

爽やかや案内の僧の徳溢れ

里坊に澄む川の瀬や穴太積

燈火親し子の婚ばなし再燃す

父母の地の遠きに詣で秋彼岸

雨霽れし茶房近くに石叩き

秋 裕

小澤 菜美

落語家の立ち居するりと秋裕

阿修羅仏にまみえし余韻彼岸花

観月の船しつらへし采女池

赤とんぼ龍野は鉤手径多く (龍野三句)

醬油蔵の帳場そろばん秋湿り

町なかの大川澄めり小京都

行列のスイーツ工房花野晴

深呼吸

杉本 綾

鴨来たる

笠井 清佑

抱き起こす紫式部実をこぼし

愛宕嶺に秋夕焼の放射状

瀬の音に仄かに揺れる秋簾

竹の春葉ずれこぼるる嵯峨の道

深呼吸一気に秋の深まりぬ

にはたづみ水浴びしたる嶋の声

喧騒を離れ落葉を拾ひけり

秋 霖

三川美代子

翁 舞

小林 成子

秋霖や水墨画めく比良比叡

虫の音の止みてひととき闇深き

休耕田盗人萩に占められて

風に乗るハングライダー天高し

新生児に強き意志あり秋桜

木犀のふいの香に酔ひ路地の風

黄昏れて刈田の煙なつかしき

声高にハイカーの行く蒔田道

濃き紅を引きたる男の児秋祭

運動会行進曲はポニョの曲

来賓もステップを踏む運動会

佐保路来て業平寺のさねかつら

秋の蝶土壁荒き四脚門（海龍王寺）

陵の多き佐保路や鴨来たる

秋声や直哉旧居のサロン椅子

奈良坂にひびく良夜の翁舞

鴉声や柳生ふりなる武者窓に

九体寺に紅葉明りの鯉沈む

校庭の空へ宣誓運動会（幼稚園）

紫の上に扮せり秋扇（源氏千年紀公民館文化祭）

茶会果つ信貴山巔を昇る月

雲流る

和田森早苗

月山

増田 一代

山ほどの間引菜軽し朝の市  
爽やかやひと筆描きの雲流る  
人里を離れて蕎麦の花明り  
片恋は秋海棠の色にあり  
逆光の芒に風のささやけり  
チャンネルを替へて栗剥く夫の黙  
庭園の添水しばらく待ちて聞く

潮 汁

藤見佳楠子

メリケン波止場

宮田

香

秋日和嬰の足裏のやはらかき  
月に棲む兎指さすをさなかな  
月光に祈るともなき掌を合はす  
夫の待つあの世へつづく雁の棹  
手ひねりの歪みとつくり衣被  
うそ寒し夕餉の膳の潮汁  
パレットに少し紅色初紅葉

俳聖の辿る月山暮の秋  
弥陀ヶ原粧ふ山々映す沼  
月山の坂の険しや秋時雨  
月山の夕日木道秋の草  
秋夕映謎と神秘の五色沼  
秋麗の方言ゆかし案内嬢  
三度来し御釜はいつも霧の中

満月やマール柄の雲流れ  
こすもすの蕾つぶせば溜め涙  
チーターの「ありがとう」聞くさはやかに  
スランプをやっと抜け出し秋ゴルフ  
震災の跡を洗へる秋の波  
秋麗やメリケン波止に遠汽笛  
広告紙の飛行機上昇天高し

赤い羽根

宮崎左智子

鴟の声発止とひびき棟上る

シースルーエレベーターより罫雲

曼珠沙華吾にも少し悪女の血

「生きすぎた」と夫の口癖赤い羽根

神留守の留守を預かる神輿かな

背丈より高き杖つく秋遍路

一合飯十粒に足らぬ粟を剥く

色鳥来

森下 康子

鴟の贅埴輪口して天仰ぐ

タイガースにマジックいく度九月尽

栗剥きてお疲れさんのティータイム

じゃんけんは仲良くあひこ新松子

色鳥来後の正面私です

身を焦がす恋の話や式部の実

「夕やけ」のメロデー流れ暮早し

銀 輪

安本 恵子

秋麗や華語の師よりの文届く（北京発）

銀輪や色なき風が背を押す

濁流の大河膨らむ秋出水

神仏へ豊作の礼巫女舞へる

葱植ゑて天に召されし老農夫

農めざす青年里の稲を刈る

凄まじや蠟螂二匹雄を食ひ

鳥取梨狩り

山口キミコ

夢千代の看板と稲架並びをり

トンネルをぬければ但馬蕎麦の花

丹波路に水分りの嶺秋の風

梨狩りや食べ放題と云はれても

憂きことを埋めし砂丘秋日和

こんもりと峽の藪径葛の花

実り田の波打つ黄金背筋伸ぶ

火 祭

中川すみ子

蓼の花ひそと太閤井のほとり  
穏やかな仏足石やこぼれ萩  
町内の割当てといふ赤い羽根  
舟入りに立てる夕霧高瀬川  
鞍馬なる夜空を焦がす火の祭  
玻璃越しに初茸匂ふ山の宿  
まぼろしに亡夫の声聞き曼珠沙華

きのこ飯

新実 貞子

オペ後の瞳に大漁の鱒雲  
携帯のナンバーの数月の夜  
曼珠沙華意外と薬の律儀なり  
秋いまだゆつくりリズムの並木道  
独り夜の贅を堪能きのこ飯  
秋色の空と風ある屋上庭  
視力得て気付く老醜女郎花

秋 雨

能勢 栄子

悲しみはもう過去とせむ今日の月  
きりぎりすどこかに潜む厨かな  
立秋の雲鬱々といく日照雨  
颯爽と歩けぬ齡天高し  
一年分運び込まれし今年米  
秋雨に岩波文庫読み耽る  
仰天のニュース続く世ちちる鳴き

紅葉浮く

坂上 香菜

書院にてたまへる薄茶紅葉風  
国宝の茶室「如庵」や小鳥来る  
雨に煙る白帝城や薄紅葉(犬山城)  
稲びかり射せる山並古戦場  
天守より望む木曾川鴨来る日  
紅葉浮く朝の露天湯雨の打つ  
やうやくに秋の到来鳥の声

秋出水

海峡の渦の小さし秋澄みて  
海峡を越えて飛び火や曼珠沙華  
足腰の痛み話題に秋の山  
山村の古社を固める秋海棠  
道端に捨ててある束鳥兜  
枳の実をつつく鳥影逆光に  
濁流の二川合流秋出水

坂根 宏子

並べ売る

大夕立ディサービスに不安顔  
野に群れて山より高く夕あきつ  
曼珠沙華手に遊ばせて峠径  
月の出を青松虫が囁しけり  
秋高し再構築の墳現るる  
秋野菜自家用米と並べ売る  
毒ミルクなどの世の中霧深き

杉野原弘幸

爽 籟

木の実踏む足裏に音を確かめつ  
逆上り無心のやる気天高く  
爽籟を聴かむと丘に佇める  
高原の穂芒揺れて夕日照る  
冷まじや目玉の大き魚拓見て  
畦豆より罷り出でたる小かまきり  
品格の失せし国会冷まじき

塩路 五郎

「ポニヨ」となる

うそ寒や顔半分をマッサージ  
「ポニヨ」となる園児の遊戯秋うらら  
アンパンマン体操の園小鳥来て  
利酒師の「おつまみ」本や秋の宵  
運動会未来の五輪選手かな  
バリ島より届く絵葉書去ぬ燕  
日の丸の旗が好きなら天高し

鈴木 照子

# 瑠璃集

お姫さま

石川かおり

彼岸花柵田ふちどる明日香村  
新しき苗字に慣れず青蜜柑  
神前に映える白無垢秋日和  
秋晴れやこの日限りのお姫さま  
萩の名を知らぬ夫なり京散歩

去來の墓

古田 晴子

鴛いろの翼の羽搏ち朱鷺翔ける  
蔦紅葉比叡一望の茶房かな  
秋思あり小さき去來の墓に供華  
秋海裳散り敷く庭を踏むまじく  
オペラ聴く秋霖の夜の無限かな

美人画

北尾 章郎

高原バス遅延立待月に逢ふ  
美人画は老の妙薬美術展  
一芸は物にするべし鉦叩  
松手入さ中の携帯電話かな  
「楽隠居」死語となりけり秋深き

彼岸花

駒井 のぶ

晴れつづく寺院に誇るさるすべり  
刈田野に赤き道なす彼岸花  
ひまはりの生け垣構へ茂左工門  
新米の一俵が先づ米蔵に  
近江野の晩稲<sup>おおく</sup>田いささか色付けり

ぬくめ酒

長濱 順子

ハンゲル語交はし太宰府秋の風  
秋日和猿回しゐる天満宮  
川沿ひに屋台の灯りぬくめ酒  
運動会鼓隊園児のベレー帽  
振り返り走る園児の運動会

# 光耀抄十二月月評

塩路 隆子

三句目。新米を手にした作者が、天の恵みに感謝をしている姿である。何よりも「新米の重さかな」と言う措辞に感服、頬ずりをしたい程に愛うしく想う新米への思いが充分に感じられる佳句である。

一俵の新米届く少家族

竹内 悦子

新米の一俵が先づ米蔵に

駒井 のぶ

天恵を謝す新米の重さかな

山本 孝夫

「新米」三句を取り上げてみた。いい句である。米食である日本人にとって、今年収穫した新米の味はこたえられない。秋祭りは新米の収穫を神に感謝をするお祭り

で、いままで田を守護してくれた神が、山に帰られるのを送るお祭りであった。古くからそれほどに稲の豊作を待ちわび喜んだものである。

一句目、少家族に届いた一俵の新米。少家族ながら、どんなに心豊かになられたか、それを受け取った専びを、日本人なら共有できる心情をうまく表された。

二句目。お米を作る側からの心情である。天候に恵まれ、豊作となった今年米の第一号の俵が米蔵に積まれたという。田植えを終えてからお米になるまでの苦労は、コンバインなどを使っている現在でも想像をするに難しいものがある。米蔵に入った先ず最初の米俵をみた作者の感懐が、余分な言葉を入れずによく表現されている。

秋の野の碑は万葉の置き手紙

伊東 和子

大和には沢山の万葉歌碑がある。作者もその一つを訪れたのであろう。何といても「万葉の置き手紙」の措辞がいい。感性のいい作者独自の発想に惹かれた。この発想を忘れないようにご精進いただきたい。

佐保路来て業平寺のさねかづら

笠井 清佑

さねかづらは美男葛ともいう。秋には美しい紅色の実を多数球状につける。この句のタイミングの良さ、美男葛と業平の取り合わせ、しかも美男葛を「さねかづら」と表現しているうまさにも感服した。

山ほどの間引菜軽し朝の市

和田森早苗

朝の市に山ほど盛り上げられた間引菜。蕪・大根その他の冬菜などの子葉を間引いておひたしや胡麻和えにする。その山盛りの嵩のわりに調理をするに一握りに減ってしまう。まさに「間引き菜軽し」である。(以下略)